

船橋 淳

人間に 広がるもの

福島第一原発事故によって故郷を追われた人々の避難生活がいまだ続いているという事実を、我々はどうしてよいのか分からず、狼狽えつつけている。

当然だが、報道はニュース性のあるものばかりを追う。

その結果、福島のグランドゼロ(1F)と首都の政府、東京電力の動き、つまり、東京と福島県浜通り地方の往復運動ばかりに終始し、その<間>の場所に多く点在する避難民について、取り上げることが少なくなってしまう。

文字情報として200字ほどに要約して、他のニュースと並べても目を引くような目新しさを求められるジャーナリズムでは、<間>の人々を取り上げることが難しい。どこかに仮設住宅が新設されたとか、避難区域の新しい区分けが施行されたとか、避難所が震災から2年目を迎えるとか、節目や変化の瞬間しか取り上げられない。だから、3年近く避難生活が続き、政府発表では最低あと3年、専門家がいうには30年～数百年、故郷に戻れない人々がずっと「持続的に」その苦しみを背負い続けなければいけない状況に誰も対処できずにいるのは、情報化＝ニュース化された社会の中で<間>への感性が鈍っている、もしくは<間>への対処方法が、社会構造的に存在できないことに起因しているといえる。

原発事故から2年9ヶ月が経とうとしているのに、15万人を超える原発避難民の多くが、いまだ賠償問題が片付かないまま故郷から離れた仮の庵に住んでいる、もしくは避難指示が一部解除になっても除染や社会インフラなど環境が整わず、家族がバラバラの生活を強いられている、という宙ぶらり人生を続けている。

いわゆる20mSv問題——政府が避難区域の線引きを国際的な被曝限度基準1mSvの20倍、チェルノブイリの4倍に引き上げ、1～20mSvの<間>の地域に住む人々(それは福島ばかりでなく、広く関東・東北を覆う)に被曝を強いてきた問題、さらに除染基準もそれに

左右され除染が可能なのか否かで混乱したまま、莫大な国費が投じられ続けている問題——について、誰もが納得できる施策が打ち出せていないのも、この<間>への感性が欠落しているからに他ならない。

そして、この<間>に放射性物質が拡散する。人間が捉えることのできない隙間に入り込み、広がってゆく。

放射性物質は見えない、聞こえない、臭わない、感じない。

人間の五感、どの感覚をもってしても捉えることのできない代物をどう対処してよいのか、その解を未だ誰も提示できずにいることが、我々の慢性トラウマとなっている。

この放射性物質の感知不可能性を、ここで放射能と呼んでみたい。

放射能は、人間を超越し、人間を追いつめる。

放射能は、距離があくほど希薄になる人間の責任感・当事者意識と相まって、<間>に位置する人々を追いつめる。

それが3.11以降の日本だと思う。

無感覚と忘却により、ゆで蛙のようにじわりじわりと死に向かう。

そんなシステムをなんとかしたいと思う人間は少ないだろう。

今年9月、福島原発告訴団が刑事告訴した勝俣恒久東電元会長、班目春樹原子力安全委員会元委員長、山下俊一福島県放射線健康リスク管理アドバイザーなど33名は不起訴処分となった。誰か特定の人物に、「全ての責任がある」と訴追することは出来ないからだという。

はっきりと責任の所在をピンポイント化できない状況がつづく。

ぼんやりとした雲に隠れた「責任者たち」は遠

松橋 淳(ふなはし あつし)

1974年大阪生まれ。東京大学教養学部表象文化論分科卒業後、ニューヨークで映画を学ぶ。デビュー作「echoes」(2001年)が、「アノネー国際映画祭」(仏)で審査員特別賞と観客賞を受賞。第二作「Big River」(2006年、主演:オダギリジョー)は、「ベルリン国際映画祭」「釜山国際映画祭」でプレミア上映。東日本大震災で町全体が避難を余儀なくされた、福島県双葉町とその住民を長期に渡って取材したドキュメンタリー「フタバから遠く離れて」(2012年)は国内外の映画祭で上映。2012年キネマ旬報ベストテン第7位。著書「フタバから遠く離れて 避難所からみた原発と日本社会」も出版される。劇映画「桜並木の満開の下に」(2012年)では被災地を舞台に物語を展開し、ジャンルを越えて、震災以降の社会をいかに生きるかという問題にアプローチしている。

く霞ヶ関、永田町、内幸町あたりにいる。

集団無責任社会ですべてが距離によってボヤカされ、可視化できない。

まるで放射能のように、我々は五感で掴めないものに対処できないでいる。

結果は、最悪であることは分かっているのに!

アメリカでは環境問題でNIMBYという言葉をよく目にする。Not in my backyardの略で、ゴミなど迷惑物を自分の庭だけには捨ててくれるな、という意味だ。それは、人が誰しも持つ本性であるという認識、つまり、誰もが「自分だけは勘弁してほしい。他人はどうでもいい」と感じることは当然であり、だからこそ司法や法律がそれを規制し、歯止めとなることが求められる、という性悪説的考え方である。

日本人もこのNIMBYと正面から向き合うべきだろう。

誰もが責任逃れしようとする状態から、誰もが責任を追わねばならない状況をシェアする社会へ成長すること。

できるだろうか。

埼玉県加須市にある双葉町の避難所は、年内で閉鎖される。

多くの方の家が帰宅困難区域になっているため、約7000人の町民はこれで全国にばらばらに拡散するしかない。

ジャーナリズムが取り上げない、<間>の人々へ想像力を働かせること。

それが我々にできるささやかなことだと思う。

見えない放射能、見えない責任者たちへ、想像力を働かせること。

それがNIMBYに立ち向かうために我々が出来ることではないか。

幸い人間は、映画という芸術を持った。

映画は、目に見えないものを描き出す装置だ。